



多島研だより 最終号

多島圏研究センター 10周年：改組へ向けて

多島圏研究センターは平成10年4月に発足以来「小島嶼の自律性」をテーマに研究・教育に従事し、平成20年3月で10年を迎えました。また、平成22年4月1日に、多島圏研究センターは国際島嶼教育研究センターに改組されました。

この特集号は、多島研だよりの最終号として、多島圏研究センター10周年を記念すると共に、新たに国際島嶼教育研究センターとして発展していくために、多島研に係わられてこられた先生方に、今までの思い出や今後期待することについて記事を書かせていただきました。

平成18年－21年度センター長

多島圏研究センターから国際島嶼教育研究センターへ小さなセンターの大きな役割－

農学部 富永 茂人

昭和58（1983）年に鹿児島大学農学部に赴任してから、「南方海域研究センター」、「南太平洋海域研究センター（南海研センター）」そして「多島圏研究センター（多島研センター）」の兼務教員として、幾つかの学術調

査やセンターの各種委員会に関わってきた。最初の海外学術調査は、平成2（1990）年の水産学部練習船「敬天丸」での42日間のパプアニューギニア調査で、私とセンターの関わりの原点である。それから、現在の多島圏研究センター長まで、農学部にも籍を置きながら、国内外の島嶼農業についても調査・研究する私の仕事はセンター抜きでは考えられず、これまでのセンターの専任および兼任の先生方には心から感謝している。

さて、昭和55（1980）年に設置された南方地域総合研究センターからこれまでの30年間にセンターに蓄積された研究・教育の歴史の重みは、学内外に大いに誇ることができるものであるが、平成16年に国立大学が法人化してから、センターを取り巻く情勢なども少しずつ変わってきたように思われる。

まず、南海研センターを引き継ぎ、平成10（1998）年に文部科学省令施設として10年の時限付きで発足した多島研センターは、平成19年度（国立大学法人化後4年目）には10年目の自己評価を行った。さらに、翌平成20年度には、自己評価をもとに外部評価を受けた。その時の、センターの専任教員の方々のご苦勞と、吉田学長や兼務教員を中心とした

全学・各部局のあたたかい応援には大変感謝している。

その後、自己評価・外部評価の結果をもとに、吉田学長や執行部の後押しを受けながら多島圏研究センターの将来構想についても検討を重ねることになった。鹿児島大学戦略会議の下に設置された「島嶼研究センター（仮称）将来構想WG」と多島研センター運営委員会などの論議を経て、平成20年12月には「国際島嶼教育研究センター（仮称・案）」がまとまり、第二期の中期目標・中期計画の初年度である平成22年4月には、多島圏研究センターを改組して国際島嶼教育研究センターが発足することになった。

新しい国際島嶼教育研究センターは、これまでの国内外の島嶼地域を対象とした研究・教育の幅を広げ、新センターの専任および併任教員が中心となって全学横断型の大学院博士課程前期（修士）の教育プログラム「島嶼学コース」に大きな役割を果たすことになっている。また、鹿児島大学の第二期中期計画で掲げられている重点研究支援領域「島嶼、環境、食と健康の研究領域」のうち、特に島嶼関係のプロジェクト研究も新センターが核になって進めることが期待されている。ご存じのように、鹿児島県には南北600kmの間に連続しているがそれぞれ文化や産業が少しずつ異なる多くの島嶼が存在し、多くの人々が暮らしており、アジア・太平洋に向かって開かれている地域である。したがって、鹿児島大学が島嶼に関する研究教育を重点的に取り上げる意義と必然性もそこにある。前述の3重点研究支援領域はお互いに関連しあっており、島嶼はその全てが存在している地域であり、島嶼に関する研究と教育を行う国際島嶼教育研究センターに対しては大学内外から大きな期待が寄せられることになる。

幸いなことに、多島圏研究センターの改組により発足する国際島嶼教育研究センターには、30年間にわたる島嶼研究実績の蓄積がある。現在は、専任教員4名、外国人客員研究員1名を中心とした小さなセンターである

が、鹿児島大学の部局横断型プロジェクト研究と教育を担い、発展させ、国内地域や海外研究機関との連携を強化し、「世界をリードし、地域に貢献する島嶼研究を行う」という大きな役割を果たすことができると思っている。

平成12年－17年度センター長

多島圏研究センターの

前期活動をふりかえって

多島圏研究センター 野田 伸一

私が1998年4月に改組された多島圏研究センターに医学部医動物学教室から赴任したのはその年の7月で、井上先生がセンター長を務めておられた。私の最初の多島圏研究センターの印象は研究活動や研究会で多くの人が出入りしているということであった。多島圏研究センターに赴任する前は医学部で寄生虫学の研究だけをしていたので、多彩な分野の研究に触れる機会ができたことに感謝している。新しくなった多島圏研究センターでは、1999年に総合研究プロジェクト“多島域における小島嶼の自律性”を開始した。これは鹿児島より南方の海域に散在する小型の島嶼群を対象とした全学的かつ学際的な研究プロジェクトで、多島圏研究センターの専任・兼務教官がそれぞれの専門領域を活かしつつ各自の研究課題を実施してその成果を挙げると共に、得られた成果を有機的に連携させ、総合する事によって、“小島嶼の自律性”を可能にするための条件を探る事を目的としていた。小島嶼の自律性とは、小型の島嶼がその小島嶼においては不十分な人的・自然的資源問題を克服し、多様な自然環境や社会文化的な特性を維持しながら、多島域内の他の島嶼あるいは域外の地域と関係を維持しつつ、長期的に安定した島嶼社会の運営を行うことを言い、具体的には島嶼社会が自らの将来に対して希望を持ち、外部に対して自らの誇りを失わず、安定した経済生活を維持させ、自己

に関する政策決定のプロセスに参加できるような状況を指している。

プロジェクトの初年に当たる1999年は10月～11月にミクロネシア連邦ヤップ島において、2001年10月～11月にミクロネシア連邦ヤップ島とウリシー環礁で、水産学部の練習船（敬天丸）を使った総合研究調査を行った。2000年3月に井上先生が定年退官され、その後を受け2006年3月まで3期センター長を務めることになった。水産学部の練習船が1隻になったことから、南方海域研究センターとしての発足以来続けられていた練習船を使った大規模な調査研究は2001年のウリシー環礁が最後となった。この少し前から南西諸島を対象とした研究活動を強化する方針を立て、研究プロジェクト“離島の自律的発展のための学際的研究”を南西諸島で実施することにした。2002年度には海・陸・文化・交流の4分野に分け与論島を中心とした調査研究を行った。2003年度はさらに地域を広げ南西諸島を中心に研究調査を行った。2004年度も継続してプロジェクトを南西諸島で実施し、同時にフィリピンとフィジー諸島共和国を対象とした調査研究を実施した。また、2005年2月には第1回国際島嶼文化会議（国際学会）を主催した。2005年度もプロジェクトを南西諸島と太平洋島嶼域を対象に展開した。この年から南西諸島で実施する研究のテーマを“「新道の島々」研究・センサーゾーン形成”とし、水産学部の調査船（南星丸）を使った調査も開始し、5月には宇治群島学術調査を実施した。この間、井上先生の後任として河合先生、中野先生の後任として日高先生、青山先生の後任として長嶋先生が着任し、多島圏研究センターの教員はすべて新しくなり、新たな視点を加えた研究が展開されることとなった。

この間に研究だけでなく教育の充実も行った。2003年度から、これまで共通教育科目“南太平洋多島域：小島嶼の生活と環境”を2科目に拡張し“南太平洋多島域(1)島々と海”と“南太平洋多島域(2)人と社会”として前後期

の通年で開講することにした。また、2005年度から鹿児島県の離島の現況や取り組みについて理解するとともに地域社会の在り方や活性化について考えてもらう目的で、与論島で集中講義“島のしくみ”を開講した。

平成10年～11年度センター長

多島圏研究センターに寄せて

鹿児島大学名誉教授 井上 晃男

鹿児島大学多島圏研究センターが設立されてから10年が経過したという。このセンターは、初代の南方海域研究センター（昭和56年4月～63年3月）、第2代南太平洋海域研究センター（昭和63年4月～平成10年3月）を引き継いだ、いわば3代目である。

この初代の研究センターに私が採用されたのは、設置翌年の昭和57年であった。以後の約18年間を3代のセンターに在職し、平成12年3月に退職した。このように多島圏研究センターには、初めの2年間だけ在職したことになる。退職してからすでに9年、ここに書く話も当然古くさいものになってしまう。

在職中には様々なことがあったが、まず思い出すのは、練習船を利用した海外学術調査である。初代センター設置の初年度から、センターは、鹿児島大学水産学部の練習船を活用して、南太平洋海域・島嶼域における総合海外学術調査を実施した。参加したのは、センター専任教員、鹿児島大学内のセンター兼務教員、国内および国外のセンター協力研究者、学生・院生である。フィジー、パプアニューギニア、ミクロネシア連邦、パラオ共和国などで実施した計11回の調査に参加したのは延べ362人の研究者、院生・学生であった。

鹿児島大学では、センター新設当時、南方とくに東南アジアやオセアニアの島嶼域に対する学問的関心が極めて高く、農学部や水産学部の研究者たちが主として東南アジアの国々で精力的な調査を実施して多様な研究成果をあげつつあった。このような背景のもと

に設置されたセンターは、専任教官の数は少ないが、これに協力・支援する学内の兼務教官の数は優に100人を超え、しかもそれぞれの教官のわが国南方海域に対する眼差しにはきわめて熱いものがあった。したがって当然の帰結として、センターには、できるだけ多数のしかも様々な領域の研究者が参加できるような総合的・包括的な海外学術調査を企図することが求められた。ところが、当時の文部省の海外学術調査は、絞り込んだ研究テーマで申請しなければほとんど採択されなかった。たとえば、いくつかの研究・調査プロジェクトをたて、それらを有機的に連携・合従させて、その地域についての総合的な知見を得ようとする型のものはほとんど採択される見込みがなかった。

鹿児島大学水産学部には幸い学生の教育のための練習船がある。これを活用することができるのではないかということから、初代の中尾佐助センター長らが中心になって、「特定研究：海外学術調査オセアニア海域における水陸総合学術調査」が企図された。練習船を動かすには、まず高額の燃料代を確保しなければならない。その他の予算ももちろん必要である。事務当局の協力を得て、苦勞の末、漸く文部省（当時）から特別の予算をもらうことができ、総合学術調査が実現した。もともと学生の教育のための練習船として造られ、その目的のためにかなりのハード・スケジュールで運行されている船を、無理をして調査・研究用に使わせてもらう訳である。しかしながら、利用する研究者は船上でのマナーはほとんど知らないし、また研究船だから船は当然研究者の思い通りに動いてくれるものだと思っている。一方乗組員は、それまで、30人を超す研究者が一度に乗り込むような航海を経験したことがないし、また研究・調査についてはさして関心がない。学生の代わりにその空きベッドにたまたま研究者が乗っていると思っている風である。このような、考え方が違う2つの集団が狭い船内にいるのだから、最初からうまく行く筈はない。

当初は随分ぎくしゃくしたようである。しかしじきに双方が理解し合えて、きわめて快適、順調かつ効率的に調査が行われるようになった。関係各位の努力によってほぼ継続的に予算が確保され、目覚ましい成果を上げつつ、ほぼ毎年、実に11回の海外学術調査を実施した。

この一連の調査には、書き始めるときがないほど様々な思い出があるが、ここでは故寺師慎一教授のことを書く。これまで彼について話す機会がほとんどなかったからである。彼は私と同じ日にセンターに着任し、生年も同じ、いわば同級生であった。惜しいことに1996年10月12日、南太平洋海域研究センター在職中に、食道がんのため亡くなった。彼の調査・研究業績については、センター資料に詳しいのでここでは割愛する。

船による調査に際しては、彼は研究者であると同時に医者としても活躍した。調査地までの往復の航海は、いつも海上波静かという訳には行かない。外洋だから、むしろ荒れ気味である。仮に道中比較的静かであっても、船酔いをしやすい研究者は多い。現地到着までの7～10日間、ほとんど絶食状態で過ごす隊員も中にはいる。そんなときは、めっぼう船と酒に強い彼のお世話になる。「これはちょっと」と彼が首を傾げるほど弱っていれば、点滴をしてもらえる。航海中はもちろんのこと現地調査中にも病人らしい病人が出なかったのは、偏に彼のおかげである。「24時間営業中」という看板が掲っている彼の居室兼医務室は、私たちが彼は一体いつ眠っているのかと疑うほど、いつも大繁盛であった。現地調査中には、医療施設の乏しい調査地周辺の住民が話を聞きつけ、停泊中の船にやってきて、診察を受けたり、治療してもらったりしたことも再々であった。そのような時には、明るい、優しい顔つきで住民に対する彼を眺めているだけの私たちは、自分たちが草の根の国際交流をやり遂げたかのような幸せな気持ちになったものである。

センターをどう充実・発展させて行くのか

については、いつも彼と議論し、一緒に考えた。常々「定年は同時だから、二人一緒に退職祝いをやろう」と話してもいた。その彼が突然亡くなった。とても寂しく、耐えられないほどだった。彼は寡黙で、よく気がつく男だった。中でも、ほぼ同じ頃に、同じ病気が原因で亡くなった敬天丸の湯脇船長への気遣いは見事だった。同船長は、闘病中の体調が優れない中、気力を振り絞って私たちの調査航海を引き受けてくれた。道半ばで逝った寺師慎一教授と湯脇泰隆教授に、心からお礼申し上げます。

予期した通り老人の回顧談で終わってしまった。現役の頃はやりたいことは山ほどあったが、ついつい怠けて過ごした。今は、やりたくても知力も体力もない。鹿児島の南方海域には、多数の島嶼が広く散在している。解明されるべき課題は山ほどある。センターが、今後なお一層の知見を集積して、その国・地域・海域の平和・発展のために努力される

ことを願っている、私たちの分まで。



多島圏研究センター（総合教育研究棟5階）

多島圏研究センター専任・兼務教員

ちょうど十年前の思い出

鹿児島大学名誉教授 中野 和敬

1998年4月、前身の鹿児島大学南太平洋海域研究センターの衣がえが成って鹿児島大学多島圏研究センターが発足した。それに伴ない、それまでほとんど意識していなかった島嶼学という学問分野にも正面から向き合うことになった。そこで発足後あまり間もない7月1日より5日まで、インド洋西部に頭を出すモーリシャス島で開かれる第五回世界島嶼会議に是が非でも出席して島嶼学なるものの全体像を把握する必要が生じたのである。そんなわけで、6月末に青山さんとふたりでモーリシャスという島へ向かった。

モーリシャスは1968年以来、数個のばらばらにかなり離れた島々も領土に加えてイギリス連邦内の自治国として独立しており、我々が向かった主島の面積は、ほぼ日本の最小県の香川と同じ1865km²である。

インドネシアとオセアニアの三ネシアを擁する太平洋とか、カリブ海とは異なり、インド洋に浮かぶ小島嶼に対する知識は正直それまでほとんどなかった。ただ、足しげくかよったソロモン諸島で世話になったドド・クリーク農業研究場のドドは、どういうわけか、ニュージーランドにいたモア同様極端に言うところ、ヒトに食べられて絶滅した鳥に由来するらしく、その鳥はどうもインド洋西部にある島にいたらしいということはほんやりと知っ

ていた。

関西空港から午後飛び立って香港経由で翌朝モーリシャスに着いた。夜一度降りた香港空港は操縦士泣かせの古い方であったが、乗りかえ手続きカウンターの前にできた列の前の方に並んでいた日本人が、我々の参加しようとしていた会議で話しをするといううわさを耳にしていた長嶋先生（当時は奈良女子大学教授）らしいと見当をつけたのを覚えている。

その前の世界島嶼会議、つまり1994年の第四回が沖縄で開催されたのを、小生は聞いていたし、そのアブストラクト集も小生の研究室の書架に入れてあったけれども、多島圏研究センター発足へ向け、井上先生を中心として文部省（当時）との交渉に腐心していた最中にはうかつにも、この絶好の材料が小生には思い出せず、発足の内示後、しまった、これを使えばもっと交渉が楽に進められたのと言いあったものであった。その第四回より、さらにその前の第三回の時の決議にもとづき、会議のアカデミックな性格が一層打ち出され、この沖縄大会は第一回国際島嶼学会大会でもあった。従がって、モーリシャス開催会議は第二回国際島嶼学会大会ということになる。

6月30日朝、日本からは遠い絶海の孤島モーリシャス島へ着いた。この島は、いわゆる大航海時代より前は無人島であったらしいが、ポルトガルがアフリカ南端まわりのインド航路を開発してから、船員休養の中継地として、がぜん脚光を浴びるようになり、導入した牛とか豚のほか、比較的楽につかまえられる大型の飛べない鳥ドドがいたこともあって、新鮮な肉の供給地ともなった。ポルトガルに続いて占領したのはオランダで、その後フランスとイギリスがナポレオン戦争の余波で領有を争い、1814年最終的にイギリス領となった。フランス領時代が100年近くあったせいで、看板なども英仏両語並記のものが多い。オランダ時代より、単に航海の中継基地としてのみではなく、サトウキビ栽培地と

しても重要となり、もともとは無人島であったため、労働者をインドとアフリカから集めた。1998年当時島の総人口は、これも今の香川県とほぼ同じ100万余りであったが、その三分の二はインド系で、残りの大多数はアフリカ人とヨーロッパ人の混血（クレオール）ということである。なお、この島には大学もある。

その時の学会大会には百名をはるかに越える参加者があり、地元と国際連合諸機関からの参加者を除けば、欧米、オーストラリアとニュージーランドからが多かったけれども、フィジーおよびバブアニューギニアとか、カリブ海にある島々からの参加者も少しあった。なお、日本からは、青山さんと小生を含めて五名であった。

5日間の学会大会で、島嶼学の当時の研究テーマが大体わかり、多島研のその後の活動に対し、新たな視野が開けた。熱帯とは言え、日本では夏至と呼ぶ日を過ぎたばかりの滞在期間中は、南回帰線近くで太陽が最も遠い位置にあったため、気温も湿度も至極快適であった。

学会大会が終わって夜行便でモーリシャスを離れ、翌朝7時前に香港空港へ着いた。その日は新しい空港開港日であったから、青山さんと小生を含む乗客は、開港後多分十番め以内の到着便で新空港へ着陸したわけである。空港ターミナルはてんやわんやであった。新空港開港へ向けての準備が不行き届きであったことは、ご存知のとおり、今もって語り草である。

小生はモーリシャス滞在中、できる限り日本時刻に従がって睡眠時間を取っていたため、帰国後も時差による体調不良はほとんど感じなかったけれども、青山さんの方は、帰国後しばらくは、昼間ねむいねむいと言っていたのを覚えている。



第五回世界島嶼会議を表示する横断幕の前で。着用しているTシャツには横断幕とほぼ同じ内容のメッセージがプリントされている。

南方研・南海研センターへの感謝を込めて 鹿児島大学名誉教授 林 満

鹿大農学部の前身、鹿児島高等農林学校は1909（明治42）年に南方資源開発を使命とする国立の高等農業教育機関として設立され、現在の鹿大農学部へと継承されてきている。その農学部では、1968（昭和43）年の学部改組で熱帯作物学講座が新設され、熱帯農業に関する教育・研究が復活された。また、この改組以前にも本学には農学部と水産学部の教員が中心となって組織された熱帯農水産研究会があり、例会には多数の教員が集い研究成果などが報告されていた。さらに、他の学部においても鹿児島以南の地域研究が盛んに行われ、自然や文化について多くの研究成果が蓄積されていた。

本学では、これまでの地域研究の歴史と伝統を踏まえ、研究をさらに総合的・学際的に推進するための研究施設の創設が蟹江松雄学長のもとで計画された。そして、1980（昭和55）年に学内措置による「南方地域総合研究センター」が設置され、その翌年、アジア太平洋海域を研究対象とする省令施設の「学内共同教育研究施設南方海域研究センター」が設置された。その後、施設名称の変更をとめないながら設立当初の使命を紹継する現在の多島圏研究センターへと発展的に継承されて

きている。

小生は、1968年に農学部熱帯作物学講座に配属されて以来、30有余年にわたって熱帯農業の教育・研究に携わってきた。その間に実施した熱帯関連の海外学術調査は合計11回であった。まず最初は、1974年に海外学術調査の科研費を取得して、インドネシアとマレーシアに農学部の3名のメンバーでかけ、3か月間農村を駆けめぐり、多数の未利用資源植物を採集し、これらを農学部附属農場指宿植物試験場へ導入した。そして、導入作物の中から湿潤熱帯域で重要な食用作物である芋類（おもにヤムイモ）をそれ以降の研究対象作物に選定し、それらを継代栽培しながら生理・生態学的な研究を実施してきた。つぎに、1981年に南方研センターの第1回目の「オセアニア海域における水陸総合学術調査」に隊員として参加して以来、1995年の南海研センターの学術調査「ミクロネシアの人間と環境」にいたる15年間に、連続10回水産学部の練習船を使った学際的・総合的な学術調査に参加した。これらの調査では、現地で栽培されている作物の生産性向上を主題とすると同時に、地域の人々の食生活や風習等に興味を抱き、それらを写真記録にとどめることに努めた。

南方研および南海研センターの学術調査では学生が補佐員として採用され、彼らは現地に入ると関連する調査班に同行して調査補助の任務に当たった。補佐員に採用された農学部在籍の学生は15年間で延べ15名であったが、全員が農業班に同行し、熱帯地域で展開される粗放的で伝統的な農業や住民の生活に直接に接することが出来たことは、学生にとって貴重な体験であり、大きな収穫であった。このように小生が参加した10回に及ぶ両センターの学術調査は、学際的かつ総合的な学術調査として高く評価されたばかりでなく、学生に対する教育効果も極めて大きいものであったと評価されている。

農業班は、現地に到着するとその大学や研究所あるいは農林省の出先事業所に調査へ

の協力を要請し、派遣された先方の研究者や技術者と協議を重ねながら現地調査を実施するのが常であった。そのような中で特に印象的だったのは、治安のあまり良くないパプアニューギニア当局の対応であった。そこでは調査地域の集落（部族）の事情に精通し、集落の人々と顔馴染の職員を同行させる等の気遣いがなされていた。このような対応を受けると「農業班で良かったナー」と先方の親切な計らいに何時も感謝・感謝であった。

ところが、参加した10回の学術調査のうち、「参加しなければ良かったかな」と内心想うほどの出来事に2回ほど遭遇した。それらを思い出として書き残しておきたい。

第1番目の出来事：1981年12月12日、水産学部練習船「かごしま丸」に49名の隊員が乗り組み、調査国フィジーのスパ港を目指して出航した。これは新造船かごしま丸の処女航海でもあり、船体はピカピカ、船室は明るく気持ちよく、かごしま湾内を滑走していた。ところが、太平洋に出て大波を受け始めるとローリングが激しく、船体は左右に大きく揺れて、一寸法師の乗ったおわん舟を連想してしまうほどの揺れであった。また、舳にやや重量がかかり過ぎていくらしく、大波を受けると舳から波の下に潜り込む有様であった。その後暫く晴天が続き、海洋調査を予定通りこなしながら順調に南下していたが、北緯20度辺りまで進んだころ、南方洋上に台風が発生したことをNHK気象情報によって知らされた。しかし、それ以上の詳しい情報が入らないままかごしま丸は南下を続け、大しけの海域に突入してしまった。その大しけが数日続き、その間船体は前後左右に大きく揺れ、ほとんどの人が船酔いに苦しみ、食事を摂れる隊員は数名に減るほどの激しさであった。そんな中、台風にかなり接近（遭遇）してしまったらしい深夜、かごしま丸は、太平洋のど真ん中に浮かぶ一枚の木の葉のように波にもまれ、その様は復元出来ずに沈没するのではないかと心配されるほど厳しいものであった。この夜は、船底のベッドに硬直したまま

横たわり眠れない、「この船と一緒にあの世行きか？」という不安と恐怖に陥り、その時ばかりは、「参加しなければ…」と一晩中悔やんだ。

その後かごしま丸には、年次計画で機材が装着されて船体の揺れが緩和され、同時に人工衛星を利用する受信装置等も完備されて、何処にいても気象情報が受信できるようになり、処女航海のような不安は次第に払拭され、乗り心地の極めてよい船へと変身していった。

第2番目の出来事：1990年、パプアニューギニア・ラエにあるPNG工科大学の卒業式の前日のことであった。練習船敬天丸がラエ港に入港すると調査隊の幹部は真っ先に共同研究の相手方であるパプアニューギニア工科大学を表敬訪問した。そして、その席で工科大学長から明日の本学の卒業式に是非出席して欲しいとの招待を受けた。船に帰り、さっそく招待されたことが隊員に告げられたが、その席で数名の隊員から「工科大学の学園紛争」に関する情報が報告された。その情報は、工科大学の学生達と警官（警察）との間にトラブルが発生し、それに対して大学は法廷での解決を学生に勧めていた。ところがこの大学の方針に不満を持つ学生らが卒業式を前にした学内にライフル銃を持ち込んだという噂があり、教授陣の中には明日の卒業式を欠席する人たちがいるらしい。かなり危険な状況であるので出席は辞退した方が良いのではないかという意見であった。

かなり長時間の意見交換の後、①学生隊員は式典へ出席させない。②隊員の出席は各自の判断にゆだねる。ということで決着した。

小生の悩みはその後である。せっかくの学長招待であり、承けるべきであろう。もし危険があるようなら学長は招待しないであろう。だから「出席」と自分に言い聞かせ、出席と返事したものの後味は悪い。一晩中焼酎を飲み明かした。この時も「参加しなければ……」と悔やんだ。

翌朝ひどい二日酔いで、車で大学に向かう。大学に近付いてびっくり、校外を警察と軍隊

が包囲？している。校門を入れてまたびっくり、祝いに駆けつけた数十組の部族（集落）民が民族衣装を纏って踊り、周りに大勢の見物者が集まっている。席に着いてみるとさらにびっくり、我々の席は警察の吹奏楽団のとなり、指揮者が楽しそうに踊りながら、ジャズ曲を指揮している。我々の警備を兼ねた配置のようだ。

多数の部族民が集まったこのようなキャンパス内でライフル銃が使われることはあり得ないし、卒業する学生や大学関係者にも全くそのような気配が感じられない。学生達を連れてくればいい思い出が作れたであろうにと悔やまれた。

終わってみるとめったに遭遇出来そうにならない貴重な体験、楽しく話せる良い思い出、両センター関係者に感謝・感謝である。

西サモア（現・サモア独立国）へ辿り着いた話 鹿児島大学名誉教授 北野 元生

大雨時に行くここが激辛ラーメン店

豪雨と水害のお見舞い申し上げます。地球温暖化を言い立てるのも簡単だが、古より大暑の末候は大雨時行（たいうときにゆく）とされ、大暑から立秋にかけて集中豪雨が起りやすい時期とされている。今年は加えて早々と秋雨前線が居坐ってしまった関係か、全国的に雨が多く、それも時と所によりゲリラ的豪雨となって、各地で雨による被害を大きくしているようである。それに台風襲来などもあった。

私は鹿児島大学を定年退官の後は、もっぱら俳句などをひねって楽しんでいる。冒頭は私の苦心の一句である。5-7-5のリズムなどは無視しているので、あるいは俳句であると認めていただけないかも知れない。ちょっと長すぎるが、季語はもちろん「大雨時に行く」である。大雨は「たいう」と読むのが正しい。しかし「おおあめ」と読んでいただいても大差はない。集中豪雨と激辛ラー

メンとの取り合わせの妙を感じ取っていただきたいと考えている。えっ、そんなモン感じられない・・・、でしょうね。

ゲリラ豪雨に触発され、鹿児島地方を襲った平成五年（1993年）のいわゆる8・6水害を思い出した。そこで上のような書き出しにしてみた。気象庁のホームページによればその日（1993年8月6日）の鹿児島（おそらく鹿児島市内）の総降雨量が259mm／1日であったということである。時間ごとに刻めば、その日の雨のすさまじさをもっと分かるかもしれないし、山間部ではこれをはるかに凌駕する雨量であったことが想像される。8月6日はちょうど立秋の直前であったから、まさに「大雨時にゆく」を地で行ったものであった。しかし丁度その折、7月27日から8月12日までの間私は鹿児島にはいなかったである。

ちょうど、8・6水害のあったころ、私は今は故人になった南太平洋海域研究センター（今の多島圏研究センター、その頃南海研という略称で呼びならわされていた）の専任の寺師慎一教授と医学部附属短期大学保健学科の内尾康人教授、歯学部の新進口腔外科医でウイルス学に詳しい国芳秀晴助手と私（歯学部口腔病理学講座教授）の4人で西サモアのアピアでぐたくたしていたのである。ぐたくたとは聞き捨てならぬとお叱りを受けそうであるが、実はそうだったのである。

「ポリネシアにおける成人T細胞性白血病の疫学」という題名で応募した3年計画の科学研究補助金（国際学術研究）が当たり、寺師教授以下3名は旧名古屋空港から勇躍西サモア（現在はサモア独立国）に向かったのであった。といえは格好は良いのであるが、実はここにいたるまでが大変だったのである。私自身を含め全員が科研に当たる可能性などゼロに等しいと考えていたのだが、さて、実際に科研に当たってみるとこれが困った。まず行き先の当てがなかったのである。というのは、われわれはタヒチを念頭に置いて科研に応募したのであるが、考えるまでもなくタヒチはフランスの直轄領でありかのフランスの

近代医学が上記白血病の病原体であるHTLV-1というウィルスの検索をタヒチでやっていないはずはなかった。それを日本人のわれわれが後追い調査をしたところで何ほどの成果を得られるだろうか。ではタヒチに代わるべきはどこだ。われわれにとってポリネシアといえば、ハワイやトンガ出身の大相撲力士の何人かが日本に滞在している(いた)・・・、を思い浮かべるくらいという心細さであった。途方に暮れたわれわれに救いの手を差し伸べてくれたのが、南海研専任の井上晃男教授であった。井上さんの研究フィールドがやはりタヒチであったので、彼が蓄積していた人的、地理的そしてあらゆる頭脳的情報を駆使して考えてくれた結果、サモアへ行ってみるとの貴重な示唆をわれわれに与えてくれたのであった。彼の指示に従って、これこれという旅行会社に問い合わせ、これこれというフライトを予約し、名古屋でこれこれという飛行機に乗り、その結果これこれという時刻に西サモアのアピア空港に予定通りに無事到着したわけである。アピア空港で人待ちしていた褐色調の皮膚をした30人近くのタクシーの運転手のほとんどが裸でわれわれを出迎えてくれていたが、その体格の立派なこと、さながら大相撲の力士やプロレスラーの集団がわれわれを待ち受けていたという感じであった。サモアの人々は一般に大柄で骨太肉厚の体格である。

さて、西サモアの厚生省と国立病院は同じ敷地建物にあり、2つは同じ組織であるというほうが実際的である。そこの役人や病院のトップクラス、そしてあとでわれわれの直接のお世話をしていただくことになる国立病院の病理医師でアサウア氏(後年彼は南海研に1週間ほど滞在することになる)などに対しておぼつかない英語を使っての交渉が始まった。われわれはすぐ明日からでもサモア人の血液検体の検索に取り掛かるつもりで実験の準備はしていったのであるが、彼らにとってみれば、得体の知れない生白い貧弱な体格のまったく異なった言語をしゃべる日本人と称

する人々をすぐ信用しすぐ好きになってくれるはずがないではないか。おまけに、なんの約束もなく準備もされていないサモアの人々の血液の検査をすぐ明日からどうぞというわけになるはずはない。結局、このツアーでは、アピアのあるウボル島の地方病院の視察を兼ねた観光やホテルのプールで時間をつぶし、わざわざ宿泊しているホテルとは別のホテルへ遠征して少々風味の異なった食事を摂ったり、名物の蟹や中華料理を食べに郊外のレストランに行ったり、夜の浜辺で南半球では水は時計回りで渦を巻いているとかいいたいか、南十字星はどれだとか北極星は見えないのと、はじめに言ったようなぐだぐだな毎日を過ごさざるを得なかったわけである。本来の目的であるHTLV-1の検査についての実質的な収穫はゼロであった。しかし、この年の訪問と上述の彼らとの誠実且つ真摯な話し合いによって、このゼロが次年度には1000を越すデータ取得という成果を生み出す原動力になったのである。人口が17万に達していないこの島国で1000を越すデータが取れたということは、今考えても奇跡に近い出来事であったと思う。で、話はこれで終わりである。はるか遠く離れた南海の孤島で2週間近くもぐだぐだと過ごすことができたというよりも過ごさざるを得なかったということであるが、今では夢のようである。このプロジェクトは3年間続いたのであるが、2年目は初年度と同じサモアへ赴き、今度は上述のように1000件を越す血液検体の検査が可能であったから、まさに初年度のぐだぐだの慮外の効用であったというべきである。3年目はトンガ王国での寺師さんと私の二人だけによる予備調査だけで終わり、結局トンガの調査は未遂のままで終わってしまった(このトンガの件では、南海研センターと大学の教官職員および科研関係の人々やトンガ王国の関係各位に対して多大のご迷惑をかけてしまった。まことに慙愧に耐えない次第である)。しかしながら、このプロジェクト総体としては功罪半ば、いや少しは功が勝っていたと考えたい

と思っている。

8・6水害の年から15年が経過したわけであるが、我々の西サモア初上陸から数えるとやはり15年が経っているわけである。改めて月日の経つのは早いものだと感慨を覚える。寺師さんは96年に亡くなったし、井上さんが00年に退官し、そのあと小生も01年に退官した。南海研の名称も今の多島圏研究センターに変わってしまった今、こんな話をしてもああそうでしたかと言われるだけかも知れない。

本稿に取り掛かったのが8月下旬（平成20年）であるが、全国的に集中豪雨の最中であった。以後間断はあるものの雨の多い天候が続いていたが、筆を置く今日はもうすでに10月半ばにかかってしまった。従前より旧暦8月15日（今年は9月14日）のいわゆる仲秋の名月と旧暦9月13日（今年は10月11日）の十三夜の月（後の月とも言う）の2度にわたってお月見をするのが慣わしであった。一般に寒くなればなるほど月は良くなる。寒さのせいで空気ももっとも澄み切るからである。立冬から立春まで、すなわち旧暦ではほぼ10月から12月までの月を冬の月、寒の月と言う。最後に一句。

泣き声とカレーの匂い十三夜

誰の泣き声かなど無粋な質問はしないように。艶っぽい俳句だなと思っていたら正解である。それにしてもカレーとは何だ？（完）

稿を終るに当たって、本稿の作成にご協力くださった井上晃男名誉教授および多島圏研究センターの楠本浩子氏に深甚の謝意を表します。文中、当時の職名を用いた。

面白い土間の使い方

鹿児島大学名誉教授 土田 充義

1. 高床・土間・土座

床が高い住居を高床住居といい、地面を使う生活を竪穴住居という。高床住居は南方か

ら日本に入り、竪穴住居は北方から伝えられたという。気候風土を考えれば当然といえるかもしれない。高床住居は高貴で、竪穴住居は庶民の住居と家屋文鏡から指摘されている。高床住居は竪穴住居に影響し、土間の生活面に床が敷かれるようになった。

板敷きや地面を生活面としない土座がある。それは東北などにあり、地面に柵からを敷いて、その上に筵を置いて生活する。竪穴住居内で寝るには一段土を高くして何か敷物を置いたであろうから、竪穴住居に属することになろう。

2. ポナペ島の住まい

ポナペ島の住まいは高床住居と土間が分離している。つまり、カマドのある家屋は土間だけで、板敷きの部分はない。鹿児島は主屋のオモテと台所のあるナカエが別々だが、ナカエには板敷きの部分もある。土間だけのナカエはない。

そこで、ポナペ島の住まいと鹿児島のは違ふと思う。鹿児島のはオモテとナカエは違ふ。最初、ナカエだけがあって、後に、接客の座敷が造られてオモテが成立したと考えられる。ところが、ポナペ島では高床と土間が同時に並存した。それで、生活が可能になった。食べる所と寝る所が確保できたからである。

3. ポナペ島の土間の使い方

板敷きの家屋とカマドやイロリのある家屋は離れている。イロリで作った料理を板敷きで食べるには運ぶことになり、不便な距離である。事実、イロリの近くで食べている。土間で食事を作り、食べていたのであろう。小さな木に腰掛けたり、腰をかがめて食べており、土間は大切な生活の一部であった。一方高床は寝室に大切であった。昼間の生活の土間、夜の生活の高床といえる。

4. 地面に腰を降ろす

ポナペ島のお祭りに演じる人も見学する人も地面に腰を降ろす。集会所では石を並べた上に座るように出来ている。実に面白い使い方である。このことはイロリのある土間の使

い方にも繋がる。

私達は板敷きの方が快適だし、板の上に畳、更に座布団があればもっと気持ちがいい。土間を捨ててしまった生活である。以前は板敷きと土間とは対等であったに違いない。ポナペ島の土間からもう一度、土間の生活を見直してはどうかと問いかけているようであった。玄関と裏口を土間で繋いでみてはどうかだろうか。貯蔵する場が土間であったらどうだろう。台所を土間にしたらどうだろう。などと一度、土間の生活を検討して、その後に、床式の生活を求めても遅くはないだろう。土間は面白い生活空間を提供してくれるかもしれない。

南西諸島の火山映像観測から

フィリピンと東アジアへ
鹿児島大学名誉教授 木下 紀正

皆既日食（2009年7月22日）の絶好の観測地としてトカラ列島が注目を集めている。その中の諏訪之瀬島は桜島と似た噴火タイプの火山島で、文化・明治噴火（1813・1884年）では爆発や溶岩流出で無人島になった時期がある。最近数年間の噴火活動は日本で最も激しかった。2002年8月、筆者など鹿児島大学噴煙研究グループはインターネットに接続した火山噴煙の自動観測システムを諏訪之瀬島北東25kmの中之島に設置し、2007年7月まで観測を続けた。諏訪之瀬島の中では観測システムを設置する適切な場所が確保できなかったが、2008年に平島小中学校諏訪之瀬島分校の体育館が完成したので、その2階の絶好の場所で8月から映像観測を再開した。設置に当たっては十島村当局のご理解と、離島ブロードバンドネットワーク推進研究を行っている鹿児島大学学術情報基盤センターのご支援を頂いた。

トカラ列島の南北にも南西諸島に属する火山島が連なり、九州本土の火山とともに西日本火山帯として太平洋を取り巻く「火の環」

の一部をなしている。そのうち、俊寛伝説の舞台である薩摩硫黄島は大隅海峡に横たわり、硫黄岳から有史以来活発に噴煙が上がっている。諏訪之瀬島に先立ち、1998年7月にこの島でデジタルカメラとビデオカメラのインターバル撮影方式で噴煙自動観測を開始した。2002年夏にはインターネットに接続したパソコン自動観測システムに変更し2007年夏まで継続した。

デジタルカメラなどによるインターバル撮影方式での経験は、フィリピン・マヨン火山の観測や中国長春とモンゴルにおける黄砂の映像観測にも活かすことが出来た。フィリピンには環太平洋火山帯に属する多くの活火山があり、1991年にはピナツボ火山が20世紀最大級の大噴火を起こし、大きなカルデラ湖を残した。その後ではマヨン火山が最も活動的であり、5年程度の間隔で爆発的噴火と溶岩流出を起こしている。秀麗な山容のこの火山から11km南方の観測所で2003年6月からインターバル撮影方式で自動観測を始めた。これはフィリピン火山地震研究所との共同研究で、翌年春にはインターネット接続の自動観測システムを設置した。2006年夏の大噴火では、3000km離れた鹿児島大学からリアルタイムで夜の溶岩流下などを観測できた。これには南西諸島火山観測で開発した近赤外カメラ方式が役立った。これらの噴煙観測研究のまとめは2006年12月の多島域フォーラム「アジア多島域と鹿児島の戦略」で報告した（南太平洋海域調査研究報告、No.49）。

鹿児島大学と交流協定を結んでいる中国・東北師範大学の研究者と共同で、春季黄砂の長期自動撮影を2003年に開始した。2004年からはモンゴル水文研究所のメンバーも加わり現在に到っている。黄砂ページ (<http://arist.edu.kagoshima-u.ac.jp/adust/kosa-e/kosa-e.htm>) では吉林省長春やウランバートルなどの1時間毎の空の様子を見ることが出来る。

鹿児島港から深夜のフェリーに乗船すると、翌朝にはトカラの島々に到着する。同様

に東京竹芝桟橋からの2つの深夜便フェリーで火山島の連なる伊豆諸島を訪れることができる。そのひとつ三宅島では、2000年夏の爆発的噴火に続く大量の火山ガス放出で4000人近くの住民は島外避難を余儀なくされ、2005年2月にようやく帰島が始まった。鹿児島大学グループでは桜島の噴煙観測と火山ガス濃度の研究に基づいて、三宅島でも火山ガスの危険が大きいのは強風による風下への吹き降ろしであることを解明した。これには鹿児島大学連合大学院農学研究科受信のノア衛星データによる噴煙画像や、日本の地球観測衛星データによる植生被害の解析などが役立ち、その結果は住民帰島の道を探るのに貢献した。三宅島や南西諸島の火山活動と噴煙・火山ガス研究をテーマに、2002年11月に多島域フォーラム「列島火山の噴煙活動を探る」を催した。これには第一線の関係研究者が集い、三宅島など遠近からの多くの参加者とともに充実した討議がなされた。このような会合のヒントは、1998年2月の南太平洋海域研究センター・シンポジウム「有孔虫からみた環境と古環境」などから得られた。

フィリピン・インドネシアや南太平洋には多くの火山島があり、火山との共生は切実な課題である。地域に根差した鹿児島大学の研究活動が東アジア・西太平洋での国際貢献に活かされることを願っている。そこでは多島圏研究センターの大きな役割が期待される。



十島村フェリーで南西から見た諏訪之瀬島。左手が最高峰の御岳（799m）、↓が観測点の体育館

多島圏研究センターと水産学部練習船

水産学部鹿児島丸船長 東 政能

私は、多島研センターの前進である南海研

が現在のかごしま丸で処女航海をした頃からの付き合いで、太平洋や日本の島嶼域における研究のお手伝いさせていただきました。水産学部の練習船を利用して非常に多くの島嶼域に訪れておりますが、代表的な島々としてはかごしま丸ではフィジー諸島・パプアニューギニア・ソロモン、敬天丸ではパプアニューギニアやヤップ、南星丸では薩南・奄美海域の無人島などが挙げられます。これまで、多くの研究者が乗船し、黒潮の源流となる熱帯～亜熱帯海域において海洋観測機器を使った調査、港がない無人島での調査のために練習船の交通艇を使ったアクセス、沿岸域において船舶機材を使った底泥・ベントス・海藻の標本採取、練習船内での研究発表会や学術交流会など、多岐にわたる研究に利用して頂きました。中でも印象深いのは、敬天丸で訪れたパプアニューギニア向け航海で、首都のポートモレスビーを初め多くの港に殆ど毎年のように寄港し、さまざまな特色のある研究活動に利用して頂いた事です。当時は、パプアニューギニアに本学部の松岡教授がおられ、地元の漁業についていろいろとご案内頂いたものです。

太平洋の島嶼域は、水産学部練習船が漁業・海洋観測実習を行う熱帯～亜熱帯海域に多く点在しており、船舶でしかアクセスできないような所もあります。本船の当該海域における教育研究活動は、練習船としてはわが国屈指の実績も残してきています。今後、練習船の航海域や余席をうまく調整しつつ、島嶼域の研究に活用して頂ければと思います。



ミクロネシア調査

ヤップ島紀行 医療班

医歯学総合研究科感染防御学講座

准教授 吉家 清貴

【調査前】

医療班の一員として1999年10月のヤップ島調査隊に参加した。現地での調査だけと考えていたが、実際にはいろいろな面で貴重な体験をさせてもらい、有意義な調査であったと感じている。航海途中の海上大学では各分野からの参加者による講義は、日ごろなじみのない話であり面白かった。海洋調査班による海水採取の際には、多数の烏賊が群れてきたのを即製の疑似餌で釣ろうと試みたのは愛嬌。

今回の調査隊は4つのグループで構成され、水産資源班、農業班、人文文化班そして私たちの医療班があり、太平洋多島域における小島嶼（孤立した小島）がどのようにして自律ある産業、経済、文化ならびに生活を営んでいるのかを知るのが目的である。調査結果から水産、農業、医療に関してアドバイスができれば地元にも調査結果を還元できるはずである。

しかし、調査開始までに行く先が思いやられるいくつかのトラブルが発生した。ヤップ島上陸に際しては、参加者の健康診断表が不備であることが判明。急遽診断書作成を命ぜられた。さらに、ミクロネシア連邦という行政府のシステムと旧来の首長制度が混在しているお国柄、行政府の決定が首長会議で覆されることもあり、まさに、農業班の事前交渉が振り出しに戻ってしまう事態に進展。農業班が交渉で手間取る間、医療班は病院へ。この島には12カ所の医療出張所があることを事前調査でつかんでおり、そこを拠点に現地の人々の健康診断をしつつ、村落周辺の蚊の発生状況、ボウフラの生息する水たまりの分布調査を行う計画であった。ところが、病院で聞かされたのは「出張所は2ヶ月前に全部閉鎖された」との情報。なんととも暗雲たれこめる調査スタートであったのが、記憶に新しい。

【調査地・調査方策】

ミクロネシア連邦ヤップ州ヤップ本島コロニア市が着岸した州都の町。病院に挨拶に行くため自転車で出発する。港を出て、道路を200mも走ると、右手に州庁舎。二階建ての銀行、マーケットが入った建物、それに続くビデオ店、床屋、土産物屋などが入った建物。左手に、Nature's Wayというレストラン兼ガイド業の店などなど。三叉路の界隈に、観光案内と酋長会議の建物、土産屋。公園があって、Manta Ray Hotelというダイビングの案内もするホテル。何か分からない建物が数軒。港とマングローブ林を横に見て、2、3分も走ると、またもやマーケットが2軒。ガソリンスタンド。またまた、マングローブ林で2分もすると、病院。「ねえねえ、これだけ?」と思わず口にしてしまった。大きい建物は、7、8軒しかなく、「州都」という言葉だけで、町の大きさを勝手に想像してはいけなかったのだ。

さて、調査方法を変更しなくてはならず、野田隊長が病院チーフと交渉。その結果、出張所が無くなった代わりに、病院からチームを組んで出かけているとのこと。では、それにくっついて行って現地でなんとかしよう、ということに決定。

まず、カニフ村訪問。レンタカーで向かうが舗装路から未舗装路へ。左に折れて細道をしばらく行くと、しっかりと踏みしめられたように道になり、ごみも小石もない。きちんと掃除が行き届いていて、なんとなく民家の庭に入っていき感じ。やがて、昔の出張所跡で診療グループに出会った。「ハロー」と、挨拶して、どんな様子なのかなと観察したが、村人が数人いるだけで診療グループの人とおしゃべり。診療なんてしていない、四五人の村人と診療グループの人間に挨拶が済むと、なにもすることがない。そこで、とにかく何をしたいのかを訴えることにして、一番お年よりの首長らしい方に名刺を出して、水の調査をしたい、蚊の発生状況を知りたい、などと訴え、村人にも名刺をばらまき、後日

では酋長の許可を簡単に取れるものの、全島で許可を取るわけにもいかない。ま、ちょこちょこっと、覗くくらいはいいんじゃない、との軽いので全島一周したのだが、田んぼの水を観察していると、通りすがりの現地人の自動車が停車して、じ〜と、観察される。海岸線を走って行くと、ふとマングローブの絵に描いたような小島がひとつ。写真、写真、とカメラ片手に降りたら、通りすがりの現地人が厳しい顔つきでこっちをにらむ。右手には刃渡り40cmはあろうかという椰子の実を割るのに使う山刀。それをほくたちに差し向けて、「オマエラ、誰ノ許可デ、ココニ来タンダッ。酋長ノ許可ハモラッタノカア・・・」と、すごい剣幕。こりゃあ、やばいは、と早々に退散するはめに。実は、ヤップ島の土地制度は完全私有制。つまり、私有地でない土地は幹線道路だけ。ちょっとしたわき道はりっぱな私道。道路に落ちている椰子の実、葉っぱ、草花などなど、すべてが私物。海岸の蟹、魚にいたるまでその土地と海の所有者のもの。海も沖の方まで私有漁場で、ほいほいと海水浴なんて許されない。沖の小島も勝手に写真なんか撮ってはいけない。ほくたちの行動は、感覚的には、日本で自宅の庭を勝手に外人が覗きこんで、写真に撮りまくる状況と同じなのであった。

また、確認できなかったが、島民の自殺率が高いという話を聞いた。孤島であり、経済的に貧しく、しかし、テレビではアメリカの消費生活が放映され、島を出た優秀な若者は帰りがたらない。経済的發展とはなにか、物質的充足とはなにか、精神的満足とはなにか、などと柄にもなく考えさせられた。

【ヤップ島住民の健康調査報告書】

ヤップ島住民69名のアンケートを含む健康調査を行った。内、24名については検尿を実施し、希望者には血糖測定も実施した。

調査対象は、男性が9歳から75歳の47名、女性が16歳から63歳までの22名であった。

血圧は収縮期血圧が160mmHg以上の高値を女性の13.6%、男性の27.7%が示し、

張期血圧が90mmHg以上の高値を女性の18.2%、男性の27.7%が示した。調査が日中の屋外であったことを考慮すると、収縮期血圧200mmHg以上または拡張期血圧100mmHg以上を高血圧症と判断すれば、該当するものは女性3名(13.6%)、男性6名(12.8%)であった。喫煙している者は女性1名、男性5名で、男性の喫煙と高血圧との関連が疑われた。脈拍数が毎分100回以上の頻脈を示す者は男性に2.1%に認められた。

検尿検査は女性11名、男性13名に行った。

尿蛋白陽性者は女性には認められなかったが男性では15.4%であった。1名は30mg/mlと高値を示したが、尿蛋白陽性者は尿潜血陽性者に一致せず、腎臓実質の器質的障害とは思われなかった。尿潜血陽性は女性の約半数(45.5%)に認められた。このうちの3名は閉経後と思われる年齢であったことから、腎障害あるいは子宮疾患が疑われた。40歳以上の3名の男性(23.1%)が潜血陽性であった。男女を問わず40歳以上の潜血陽性者7名中5名(71.4%)は高血圧であることからなんらかの腎障害が疑われる。尿糖陽性者は男性1名のみであり、血糖を測定したところ309mg/dlと異常高値を示し、糖尿病が疑われた。尿pHでは7以上の強いアルカリ性を示す者が認められ、そのいずれもが石灰とビンロウジュにタバコを混ざる嗜好をアンケートに回答しており、島民に見られるビンロウジュ嗜好の影響が疑われた。この所見はアルカリ性の尿では再吸収が促進される薬剤が体内に予想以上に滞留する可能性を示唆しており、島民に対してこのような薬剤を投与する場合の薬剤投与量、投与時間、間隔などを考慮する必要があるものと思われた。

以上のことから、ビンロウジュ嗜好、タバコの混合および喫煙と尿pH、尿潜血陽性、ならびに高血圧の関連についてより広範な島民の健康調査が必要であると思われる。また、島民に対する心理アンケート等による精神的健康調査も必要であろうと考える。

プロジェクト活動

平成21年度

プロジェクト「離島の自立的発展のための学際的研究」を南西諸島と太平洋島嶼域を対象に研究調査を行いました。

- 1) 「新・道の島々」研究・センサーゾーン形成
 - ・口之良部島学術調査 5月11日-14日
 - ・島嶼プロジェクト「豊かな島嶼の発展のために」
 - ・公開講座「薩琉400年：東アジア島嶼圏の形成－総括と展望－」2月13日
- 2) ミクロネシア環礁域生態系における環境変動の影響を類型化するための定量調査
12月3日-16日調査実施

平成20年度

プロジェクト「離島の自立的発展のための学際的研究」を南西諸島と太平洋島嶼域を対象に研究調査を行いました。

- 1) 「新道の島々」研究・センサーゾーン形成
 - ・三島学術調査 5月12日-16日（台風2号接近のため中止）
 - ・公開講座「無垢の自然が残るトカラ列島」12月13日
 - ・シンポジウム「鹿児島海の生きものたち - クラゲ・ヒドロ虫・イソギンチャクの世界」9月27日
- 2) ミクロネシア環礁域生態系における環境変動の影響を類型化するための定量調査（科学研究費基盤C・一般）
 - ・ミクロネシア連邦ヤップ州学術調査11月4日-28日

平成19年度

プロジェクト「離島の自立的発展のための学際的研究」を南西諸島と太平洋島嶼域を対象に研究調査を行いました。

- 1) 「新道の島々」研究・センサーゾーン形成
 - ・硫黄島・与路島調査6月18日-22日
- 2) ミクロネシア環礁域生態系における環境変動の影響を類型化するための定量調査（科学研究費基盤C・一般）
 - ・ミクロネシア連邦ポンペイ州学術調査11月9日-19日
 - ・シンポジウム「太平洋島嶼域における人と自然の共生－学融的研究の試み－」2月23日

平成18年度

プロジェクト「離島の自立的発展のための学際的研究」を南西諸島と太平洋島嶼域を対象に研究調査を行いました。

- 1) 「新道の島々」研究・センサーゾーン形成
 - ・臥蛇島学術調査5月29日-31日
 - ・シンポジウム「闘牛ネットワークと周辺－周辺」10月20日
- 2) 環礁域の環境変動：国際共同研究による拠点形成（科学研究費基盤C・企画）
 - ・ミクロネシア連邦チューク州調査9月10日-19日、11月12日-19日
 - ・国際シンポジウム「地球温暖化とグローバリゼーション：太平洋島嶼地域」2月3日

平成17年度

プロジェクト「離島の自律的発展のための学際的研究」を南西諸島と太平洋島嶼域を対象に研究調査を行いました。

- 1) 「新道の島々」研究・センサーゾーン形成
 - ・宇治群島学術調査5月9日-11日
 - ・シンポジウム「しまうたの未来」10月29日
- 2) 地球温暖化と小島嶼に関する国際共同研究
 - ・南太平洋島嶼国にみられる伝統的社会における人と自然の共生システム
 - ・国際シンポジウム「地球温暖化と太平洋島嶼地域」2月4日
 - ・ミクロネシア連邦チューク州にて予備調査を行いました：実施期間（7月と1月）

平成16年度

プロジェクト「離島の自律的発展のための学際的研究」の調査を南西諸島、フィリピンそしてフィジー諸島共和国を対象に行いました。また、国際会議を主催しました。

- ・市民公開シンポジウム&公開講座「島の農業」2月26日
- ・市民公開シンポジウム（南太平洋における人と自然の「共生」）7月10日
- ・第一回国際小島嶼文化会議

平成15年度

プロジェクト「離島の自律的発展のための学際的研究」を南西諸島を中心に研究調査を行いました。

- ・与論勉強会6月23日・7月28日
- ・シンポジウム「東南アジアにおけるイスラームの現在」12月13日
- ・公開講座「タラソセラピー（海洋療法）」11月15日

平成14年度

プロジェクトのテーマを「離島の自律的発展のための学際的研究」とし、4つの分野（海・陸・文化・交流）に分け行いました。調査地は与論島を中心とした南西諸島とした。

- ・シンポジウム「制度を生きる－フィリピン地域社会経済の学際的研究－」12月21日
- ・シンポジウム「列島火山の噴煙活動を探る」11月9日

平成13年度

第1年次（平成11年度）におこなったミクロネシア連邦ヤップ州ヤップ本島部での調査を踏まえて、10月10日～11月6日にミクロネシア連邦ヤップ州のウリシー環礁で調査を行いました。

- ・公開講座「長寿を考える」2月16日
- ・シンポジウム「外から奄美文化を見る」2月23日

平成12年度

プロジェクトを個別研究部門と共同研究部門に分けて研究を行いました。

1) 個別研究

研究課題（1：小島嶼における人間活動、2：小島嶼における自然環境、3：小島嶼における人間と自然の相互作用）に沿った南西諸島およびミクロネシア連邦ヤップ島で調査研究

2) 共同研究

「薩南諸島～21世紀への挑戦～」日本語版と英語版出版



- ・ 自主講座「島に生きる（島を語るつどい）」 2月16日

平成11年度

プロジェクトの初年に当たる平成11年度は10月13日～11月9日にミクロネシア連邦ヤップ島において総合研究調査を行いました。

- ・ シンポジウム「多島域と情報社会」 8月22日

写真集



シンポジウム「シマウタの未来」



硫黄鳥島調査参加者



南太平洋大学・グアム大学・KORDIとの打合せ



平成13年度ミクロネシア調査隊



平成11年度ミクロネシア調査



敬天丸

お知らせ

多島圏研究センターは平成22年4月から国際島嶼教育研究センターに改組されました。専任教員4名、外国人教員1名、併任教員、兼務教員という構成で活動を行う予定です。活動内容などの詳細は次号の「島嶼研だより」でお知らせいたします。

編集後記

この「多島研だより特集号」は出版広報部会で平成20年に企画され、様々な先生方に原稿を書いていただきました。ご協力いただいた先生方には改めて御礼を申し上げます。出版がここまで遅くなってしまったのは、編集を担当した私の怠慢で、深く反省をしています。次号からは出版の担当者も変わり、「島嶼研だより」となり、新しい風をお伝えできると思います。

今後ともよろしく願いいたします。

(河合 溪)

多島研だより No. 59 平成22年6月10日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24

電話 099 (285) 7394 ファクシミリ 099 (285) 6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>